

Title	定関係代名詞の歴史的変遷に関する独英比較： welcher及びwhichを中心とする歴史社会言語学的考察
Sub Title	Zum Vergleich des Systemwandels bestimmter Relativpronomina im Deutschen und Englischen—Historisch-soziolinguistische Betrachtung der Entstehung und Entwicklung von welcher und which
Author	森澤, 万里子(Morisawa, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.49 (2012.) ,p.155- 182
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大谷弘道教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kodo OTANI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20120330-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

定関係代名詞の歴史的変遷に関する 独英比較

—— welcher 及び which を中心とする
歴史社会言語学的考察——

森 澤 万 里 子

1. はじめに

言語変化をめぐる問題は、周知の通り、専らこれに携わる歴史言語学のみならず、社会言語学にとっても主要な関心事の一つとなっている。例えば、ウィリアム・ラボフは『社会言語学的パターン (Sociolinguistic Patterns)』(1972)の7章で言語変化に関する論点に言及し、それを五つに要約している(160–161)。その中の一つが「どのようなメカニズムにより変化は進むか」という点であり、¹⁾ ラボフ自身もその解明に取り組み、上掲書の他、彼の著名な主著にその成果がまとめられている。例えば、変化を牽引する社会層との関連で「下からの変化 (change from below)」, 「上からの変化 (change from above)」(Labov 1972: 178, 179)といったメカニズムが指摘されているが、これらについては過去の言語現象を対象

1) 他の四点は、「言語の展開に一般的な方向性はあるか」、「言語変化に影響を及ぼす普遍的な制約とはどのようなものか」、「新たな言語変化を持続的に成立せしめる原因は何か」、「言語の展開に適応機能は存在するか」である。

とする歴史社会言語学の研究、例えば、Nevalainen/Raumolin-Brunberg (2003: 127, 128) 等でも考察が行なわれている。

このような同一言語内における言語変化の歴史社会言語学的考察は、英語に関しても、そしてまたドイツ語に関しても行なわれてはいるが、しかし、複数の言語に共通して現れる言語現象に関し、個別言語における展開過程を社会言語学的観点のもとで比較する研究はまだ十分に進められているとはいえないように思われる。そこで、本稿では、この問題に取り組むことにより、従来研究の多くとはいささか異なる切り口で、言語変化のメカニズムに迫ることを試みたい。その際、着目する言語現象が、ドイツ語及び英語の定関係代名詞²⁾である。

現代の標準的なドイツ語では *der*³⁾, *welcher*⁴⁾, また英語では *that*, *which*, *who* が定関係代名詞として使用されるが、両言語の源であるゲルマン語には元来関係文自体が存在しなかったと推測されている (Romaine 1982: 64)。後述するように、ドイツ語、そして英語においてもまず指示代名詞から定関係代名詞 *der* もしくは *that* が展開し、後に疑問詞と同形の語、即ち *welcher* やこれと同源の *which* 等も定関係代名詞の機能を得ることになる。ただし、上に掲げた現代ドイツ語及び現代英語の定関係代名詞の体系を比較すれば分かるように、英語の *who* に対応するドイツ語の *wer* は一般的な定関係代名詞としては使用されない。また、実のところ、同源の *welcher* と *which* に関しても、後者が通常用いられる定関

2) ここで対象とされているのは、名詞、代名詞、もしくは数詞を先行詞とする関係代名詞である。

3) 本稿では *der* の他、後述の *welcher* 及び英語の *who* 等に関しても、それらの変化形が顧慮されているが、煩雑さを避けるため、[性・数・] 格を詳述する必要がない場合は [男性・] 主格形のみを代表として掲げることとする。

4) 次の例に見られるような *wie* と代名詞の組み合わせも定関係代名詞に相当する機能を持つが、本稿では紙面の制約からこの種のものに関する記述は割愛する： „Er trug eine Kleidung, **wie sie** ein Schornsteinfeger trägt.“ (彼は煙突掃除人が着るような服装をしていた。)

係代名詞の一つであるのに対し、前者はその使用に著しい後退が見られる。

そこで本稿においては、両言語それぞれにおいて現代語に見られる定関係代名詞の体系が成立する過程、殊に、welcher と which に関し、同源の定関係代名詞の使用に相違が現れるそのメカニズムを歴史社会言語学的観点のもとで考察することを試みたい。そのため、まずは現代ドイツ語及び現代英語で使用される個々の定関係代名詞の機能を概観し、次に定関係代名詞が成立する言語内的要因を従来研究の成果を踏まえて記述することとする。

言語変化をめぐる問題の解明が究極的には言語の持つ普遍性の把握を目指すものであることを顧慮するならば、このような方法で、個々の言語に関する従来研究の集積をまとめ、その内容を比較することにより、個別言語の枠組みを超えた考察を行なうことにも十分意義が認められるであろう。

2. 現代語における定関係代名詞の体系と機能

2.1. ドイツ語

それでは、現代標準ドイツ語における定関係代名詞 der, welcher の機能を概観しよう。

形態論に関しては、der が全ての性・数・格において屈折形を持つのにに対し、welcher は属格形を失っている (Duden 1998: 346) という点に両者の相違があるが、統語論上、また先行詞のタイプに関しては両者とも同条件のもとで用いられる⁵⁾ と言ってよいだろう。

しかしながら、1章で述べた通り、現代語において welcher の使用は大

5) ちなみに、中性形の指示代名詞 (das 等)、不定代名詞 (alles, etwas, nichts 等)、最上級の形容詞を名詞化したもの、名詞化された原級の形容詞のうち、一般的、不特定、もしくは純粋に概念的な意味合いを持つもの (例えば all das Schöne) の後ろでは通常不定関係代名詞 was が現れる (Duden 1998: 765)。

きく後退しており、次の例に見られるような、同語反復の回避という目的以外ではさほど使用されない (Helbig/Buscha 1987: 677) :

- (1) [...] sind die vermeintlichen Spitzen der Gesellschaft ebenso kaputt wie **die**, **welche die** Autorin mit dem Begriff »graumäusig« kennzeichnet. (Nürnberger Nachrichten, 20.03.2006; 森澤 2009: 710) ([...] 社会の頂点をなすと誤解されている人々は、作家が「溝鼠的」という概念で特徴付けた人々と全く同様におかしくなっているのだ。)

その一因は、文体上、いわば無標の *der* と異なり、*welcher* には「高尚な言語表現」(Polenz 1994: 277) — Duden (1998: 346) では「重苦しい表現」と記述されるに到っている — という文体的特質が割り当てられたことに探ることができるが、このような機能を得ることになるその経緯については4章で改めて取り上げることとする。

2.2. 英語

以上、確認したように、ドイツ語の場合は、定関係代名詞が二つしかなく、しかも一方が殆ど使用されなくなっているため、機能の分担がそれほど大きな問題にならないが、複数の定関係代名詞がどれも一般的に使用される英語では、その分担方法がかなり複雑である。本節ではその細部に立ち入ることは断念し、4章で行なう考察に必要となることがらの的を絞って言及することとするが、その前に、英語の定関係代名詞の体系と機能を概観する際に顧慮すべきもう一つの要素、「ゼロ関係詞 (zero form)」(小寺 2004: 17) にふれておきたい。

「ゼロ関係詞」とは (2) に見られるように、関係文⁶⁾ と同様の機能を果

6) 周知の通り、英文法では通常、ドイツ文法の「副文」に相当するものを「節」と呼ぶが、本稿では両言語に関する記述が混在するため、英語につい

たす限定文でありながら、そこに関係詞が現れない事例に対して使う用語である：

- (2) The ring **I saw yesterday** was expensive. (私が昨日見た指環は高価だった。)

(2) のタイプの文は、定関係代名詞 *that* もしくは *which* が省略された例として説明されることもあるが、3.1. 節で述べる通り、歴史的には定関係代名詞で導かれる関係文に先行して現れる形式と考えられている（荒木 1978: 73; Curme 1931: 204–205）。⁷⁾

ゼロ関係詞を含めて、英語では四つの形式が競合することになるが、これらの使い分けに際して問題となる観点は i) 形態論・統語論上の機能、ii) 先行詞、iii) 制限機能⁸⁾、iv) 文体・使用域の四つにまとめることが

でも「関係節」ではなく、「関係文」という用語を使用し、表記の統一を図ることとした。

- 7) ちなみに、イエスベルセンは関係詞が現れない関係文を“contact clause”（接触節）と呼んでいる（Jespersen 1926: 105）。カームの見解では、連結詞を欠くこのタイプの文は、厳密な意味での関係文ではなく、先行詞を説明する同格的な文である（Curme 1931: 234）。
- 8) 即ち、「制限的用法」、「非制限的用法」のいずれか、もしくは両方で使用できるかという観点である。以下に、Jespersen (1926) から両用法の例を引用しておく：“X had four sons **that became lawyers.**” (111) (X には法律家になった四人の息子がいた。)；“X had four sons, **who became lawyers.**” (同上)。最初の例は制限的用法のもので、「X には息子が何人かおり、そのうち四人が法律家になった」ということが含意される。それに対して、二番目の非制限的用法の例については、「X には息子が四人おり、その全員が法律家になった」と解釈できる。この二例の句読法から看取されるように、文語の場合、両者は通常コンマの有無によって区別されるが、ただし、その有無が常に両者を見分ける指標となるとは限らない（詳細は小寺 2008 を参照）。なお、ドイツ語では、制限的・非制限的用法の相違が定関係代名詞の選択の際に問題とならなかったが、両者の区別が全く存在

できる。

that に関する形態論・統語論上の制約は、屈折形を持たないことから、属格、即ち所有格が問題となるときには使用できない (Curme 1931: 224) ということである。⁹⁾ また、ドイツ語と異なる英語の特徴は、定関係代名詞が前置詞句を形成するとき、前置詞が関係文の冒頭のみならず、末尾にも現れうる点だが、that の場合は前置詞を必ず末尾におく (ヴァカーリ 1964: 191-192)。先行詞については、文法上の性が衰退した英語ではドイツ語と異なり、まず、「人」を表す名詞類か否かという意味論的側面が問題となるが、that はいずれの場合にも使用可能である。¹⁰⁾ 第三の観点については、非制限的用法で現れることもあるが、ただし、制限的用法で使用される傾向が強い (荒木 1978: 17)。文体的観点では、ドイツ語の場合同様、英語においても同語反復を避ける傾向が見られ、指示代名詞 that や that を伴う名詞に後続する場合は、which が多用される (荒木 1978: 37)。使用域、殊に文語、口語の別については、that は口語的な手段とされている (ヴァカーリ 1964: 189)。¹¹⁾

which も that と同様に屈折形を持たないが、所有格として使用する場合には、of which という形式を用いる (Curme 1931: 225)。先行詞をめぐっては、who との対立が問題となり、「人」の場合は who、それ以外は which というのが大まかな基準である。¹²⁾ 制限的・非制限的用法について

しないわけではない (Birkner 2008: 7)。

9) ただし、民衆語には古い語法の名残として、that — や which — の後ろに所有形容詞をおいて、属格の代わりをさせる例も見られる (Curme 1931: 224-225)。

10) 不定代名詞、殊に、any-, every-, no- の複合語、all が先行詞となる場合は、これらが事物を表すときに that が、人のときは who が多用される (荒木 1978: 31)。

11) ただし、本稿の執筆に当たって参照した英語文献では that の使用が少なからず見られたことから、使用域に関する that の文体的特質はあくまでも相対的な問題として捉えたほうがよさそうに思われる。

12) 厳密に言うならば、先行詞が「人」を表す名詞類であっても、人として

はいずれの場合も which は使用可能であり、使用域に関しては文語的要素と言える（荒木 1978: 26–27）。

四つの定関係代名詞のうち、屈折形を持つのは who だけであり、周知の通り、属格 whose、対格〈目的格〉whom が存在する。who は「人」—殊に「自我」が問題となる場合—に用いられる。¹³⁾ who、特に目的格の whom は文語的要素で、後者の口語での使用は避けられる傾向にある（荒木 1978: 27）。

ゼロ関係詞は、その用法をまとめた文献の記述を見る限りでは、that と同様に、所有格が問題となるときには使用されないようである（小寺 2004: 20–21）。残る主格と目的格に関しては、上で取り上げた that, who, which には実のところ制約がないが、ゼロ関係詞は一般的に目的格に相当する機能で現れる（荒木 1978: 74）。また、前置詞と組み合わせて用いる場合は、前置詞を関係文の末尾に置く。先行詞については、「人」を表す名詞類か否かということにかかわらず使用可能である（ヴァカーリ 1964: 267）。制限的用法では使用可能だが、非制限的用法の場合は定関係代名詞の表出が必須である（Curme 1931: 224）ため、ゼロ関係詞を用いることはできない。ゼロ関係詞は口語的要素であり、文語での使用は品位がないと見なされることもある（荒木 1978: 74）。

の存在そのものではなく、地位、職業、性格、人柄などを表現する場合には which が後続する：“He is exactly **the man which** such an education was likely to form.” (A. Trollope, *The Warden*; 荒木 1978: 20)（彼はまさにそのような教育を受ければこうなるだろうといった性格の男だ。）Curme (1931: 228) には、“personality” —文脈からすれば「自我」と訳するのが適当と思われる— が問題とならない場合に which が使用されるといった旨の言及がある。従って、小児、殊に嬰兒に対しても which が用いられる。

- 13) any-, every-, no- の複合語、all の後でもこれらが人を指す場合には who が現れる（荒木 1978: 31）。註 10 参照。

3. 定関係代名詞成立の言語内的要因

それでは次に、ドイツ語及び英語の定関係代名詞が成立する言語内的要因を見ることとしよう。上述の通り、両言語の共通の源であるゲルマン語は関係文を持たず、従って定関係代名詞も存在しなかったと考えられる。それゆえ英語のゼロ関係詞、即ち連結詞を欠く事例は、ある意味でゲルマン語元来の姿を残したものであり、最も原初的な関係詞とすることができるだろう (Curme 1931: 204)。その他のものは、指示代名詞から展開したもの — *der*, *that* — 及び疑問詞もしくは不定関係代名詞から派生したもの — *welcher*, *which*, *who* — の二つに大別することができる。この分類を見ると、いずれの言語においても、指示代名詞及び疑問詞・不定関係代名詞から展開した定関係代名詞が存在することから、本章ではそれらが成立したメカニズムを言語ごとに節を分けずにまとめて記述することとする。

3.1. 指示代名詞の転用

最も原始的なタイプである、連結詞を欠く関係文は、先行詞とこれを修飾する文が同格的に並べられたものと考えることができる (Curme 1931: 204)。このタイプの文は英語のみならず、古い時代にはドイツ語にも存在した。¹⁴⁾

(3) *Thie fūriston thiz gisáhun, es hártō hintarquámun [...]* (O[t]frid

14) ただし、このような連結詞を欠く関係文は古英語と古ドイツ語では稀にしか見出されない。Curme (1931: 205) ではその理由は、この時代の書き手が定関係代名詞の現れるラテン語タイプの文に慣れていてことから、連結詞を欠く関係文を避けたことにあると考えられている。ドイツ語では連結詞を欠く関係文は低地ドイツ語方言を除いて 17 世紀にその大部分が失われた (前島 1987: 106) が、英語では後述するように中世よりその使用が頻繁になる。

von Weißenburg: Evangelienbuch], IV, 4, 71) (これを見ていた
首長達はそのことで大変驚き [...])¹⁵⁾

(3) のように先行詞が名詞である場合には、定関係代名詞が欠如して
いると判断し易いが、次の例ではその判断は容易ではない。

(4) Ni sint **thie** imo ouh derien, [...] (O, I, 1, 103) (彼にまた危害を
与える者はいない [...])

(4) はいわゆる「アポコイヌー（共有構文）」の例で、**thie** — **die** の古形—
は主文に属す指示代名詞、即ち先行詞であると同時に、副文を導く定関係
代名詞の機能も兼ね備えている。元来、**thie** のような要素は、主文のみに
属す指示代名詞で、(4) のタイプの文は、(3) と同様に定関係代名詞を
欠いた文であったが、次第に先行詞を持たない文 — 即ち **thie** のような立
場の要素は副文に属す — と解釈されるようになった。

指示代名詞と定関係代名詞が個別に表出した例が (5) である。

(5) Gibót si **then** sar gáhun **then** thes lídes sahun, [...] (O, II, 8, 25)
(彼女はすぐさま飲み物の手配をしていた者達に [...] 指示した。)

本来複数主格となるべき定関係代名詞が、先行詞に牽引されてこれと同じ
複数与格 — **then** (**denen**) — となっている。この後、定関係代名詞は関
係文が要求する格で現れるようになる (Dal 1966: 198–200)。

15) „Evangelienbuch“ の用例は次の資料から引用している：Otfrid von
Weißenburg: Evangelienbuch. Auswahl. Althochdeutsch/Neuhochdeutsch.
Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Gisela Vollmann-Profe.
Stuttgart 1987. また、和訳にあたっては次の文献も参考にした：新保雅浩：
古高ドイツ語 オトフリースの福音書。大学書林 1993。

英語においても (4) と同様の用例が存在する。

- (6) [...] wile nu gelæstan **þæt** He lange gehet / mid aðsware, [...] (Exodus 557-558)¹⁶⁾ (ずっと昔に誓いを立てて約束したことを彼は今や遂行するであろう [...])

(6) に現れる **þæt** は現代語の **that** に相当する指示代名詞であるが、後続文の目的語、即ち定関係代名詞の機能も併せ持っていると解釈できる。指示代名詞及び定関係代名詞の **that** が個別に表出されるようになる過程はドイツ語の場合と同様と考えられる。¹⁷⁾

ただし、指示代名詞からの定関係代名詞の派生を扱った英語の従来研究がより大きな注意を払っているのはカーム (1931: 204-205) による次の説明のように見受けられる。

- (7) **þæt** is **se** Abraham **se** him engla got naman niwan asceop (Exodus 380; Curme 1931: 206) (それは天使達の神が新たな名を与えたアブラハムだった。)

古英語の用例 (7) には **se** が二重に現れるが、これは指示代名詞の男性・主格形である。古英語ではまだ屈折形が保持されており、(6) の **þæt** は中性・対格形 — 主格形と同形 —、女性・主格形は **seo**、複数・主格形は **þa**

16) “Exodus” (『出エジプト記』) における用例及びその現代語訳は特に言及がない限り次の文献より引用している: Joan Turville-Petre (ed.): The Old English Exodus. Text, translation, and commentary by J. R. R. Tolkien. Oxford 1981.

17) 上述のように、**that** の連続は現代語では避けられるので、(6) を現代語に訳すならば、“Now He will accomplish **that which** He long ago did promise with sworn oath, [...]” となる。ただし、**that** の連続はかなり時代が下ってからでも許容されていた (Curme 1931: 218)。

である。¹⁸⁾ (7) を現代語に置き換えるならば, “It was **that** Abraham, **that** **one**, the God of the angels gave him a new name.” となるが, **that** もしくは **that one** に相当する (7) の **se** はいずれも Abraham を修飾する文が後続することを示す機能を持っている。このような二重指示は古英語では稀ではなく, 次第に二番目の指示代名詞が後続文と一体化し, 副文を形成するようになる。さらに, 主文にこの文を接続する機能を帯び, 定関係代名詞となる。¹⁹⁾

3.2. 疑問詞・不定関係代名詞の転用

ドイツ語の *welcher*, 英語の *which*, *who* はいずれも疑問詞及び不定関係代名詞にその源を探ることができる。この三つの定関係代名詞のうち *welcher* の成立については, 疑問詞から展開したとするベハーゲルにカームが反論しており, この定関係代名詞は不定関係代名詞から派生したと主張している (Beyschlag 1938: 173)。源を疑問詞に求める場合は, 古高ドイツ語の [h]welich (「どのような性質の」) に遡ることができる。不定関係代名詞の場合は, *so hwelih so* („so einer wie“) が古高ドイツ語で現れる形式だが (Beyschlag 1938: 181), 中高ドイツ語ではそれが *swelcher* に縮まり (DWB 1984: 1344), さらに語頭の *s* が消失して疑問詞の *welcher* と同形になる (Beyschlag 1938: 178)。ベハーゲルとカームの論

18) これらとは別に, 古英語では不変化詞 *pe* も関係詞として使用された。*pe* は指示代名詞を先行詞とするときに, また, *se* は指示代名詞よりも限定的な意味を持つものに後続する際に使われる傾向が強かった (Romaine 1982: 60)。*se* にこの語を付加した *se pe* も用いられたが, 古英語期の終わりには単独で現れる *pe* が最も一般的な関係詞となった。しかしながら, 中英語期に入ると間もなく *pæt* が *pe* と交替する (ボー／ケイブル 1981: 308)。

19) 後に成立する関係文の中でも定関係代名詞と重複する人称代名詞 — (7) では *him* — が現れることは稀でなく, 18 世紀においても同様の例が見出される (Curme 1931: 207)。

争をふまえて論を展開したバイシュラークは、いずれにせよ、疑問詞と不定関係代名詞の語形が一致した後に定関係代名詞が成立する点を指摘することにより、いわば両者の折中案を提示している (Beyschlag 1938: 186–187)。

疑問詞もしくは不定関係代名詞から定関係代名詞が派生する過程は、大枠では三つの定関係代名詞に共通すると考えてよさそうである。which, who の古英語期における疑問詞及び不定関係代名詞の語形はそれぞれ hwilc, swa hwilc swa; hwa, swa hwa swa である。

疑問詞からの派生を考察することは、即ち、疑問詞が定関係代名詞として読み替え可能となる経緯を辿ることになるのだが、この点については、ボー／ケイブル (1981: 309) に who — whom — を用いた例が挙げられている。

(8) **Whom** do you want? (あなたは誰を求めていますか。)(ボー／ケイブル 1981: 309)

(8') They asked **whom** you wanted. (彼らはあなたが誰を求めているか尋ねた。)(同上)

(8'') I know the man **whom** you wanted. (私はあなたが求めている人を知っています。)(同上)

(8) は直接疑問文、(8') は間接疑問文、(8'') が関係文の例である。ボー／ケイブル (1981: 309) は例文を挙げているだけで、これらに対する詳細な説明を付していないのだが、他の文献の記述をふまえて解釈するならば次のようになるだろう。まずは (8') のように疑問文が主文に後続することにより、whom に前方照応が可能となる素地が生まれる。また意味の面では、(8') を「あなたが求めている人を彼らは尋ねた」²⁰⁾ と解釈すること

20) この解釈は whom が古い時代に不定関係代名詞としても機能したことをふまえたものだが、直接疑問文と関係文の中間に位置する間接疑問文にお

も可能になる。(8”)には、「あなたが求めている人、その人を私は知っています」という読みが先行していた—即ち、whom you wanted は the man を修飾する同格文として機能している—と考えるならば、3.1. 節で掲げた二つの説明方法のうち第二のものにならって、who が疑問詞から定関係代名詞へ展開する道筋を再構成することも可能であろう。

不定関係代名詞からの展開についてはカーム (1931: 209) の見解を引用しておく。

- (9) **Swa hwœne swa** ic cysse se hyt is. (Matthew, 26, 48; Curme 1931: 209) (私が接吻するのがその人だ。)

古英語からの用例 (9) の現代語訳は “It is he **whom** I kiss” であるが、構文を顧慮して (9) の語を現代語に置き換えるならば、**“That somebody that one I kiss [him], he it is.”** となる。that 及び that one に相当する swa は前節でも問題となった二重の指示代名詞と同種のものであり、両者が “I kiss” という説明文を指示する機能を負っている。(9) で不定関係代名詞が現れるのは、まだ問題の人物が誰なのかということが形式上明示されていないことによる。しかし、話者はこの文を口にした時点で既に特定の人物、即ちイエスを念頭に浮かべているので、不定関係代名詞が通常表す「～する者は皆」という一般化とは全く異なる意味合いが呈示されていることになる。²¹⁾ つまり、この点にカームは意味論的な側面で不定関係代名

いては、疑問詞の持つ本来の意味が弱まり、不定関係代名詞の意味あいが強まることが先行文献において指摘されている (Mustanoja 1960: 191; Romaine 1982: 61)。

21) カーム (1931: 209) は、swa hwa swa はその展開の過程で who so に還元されるが、これと並んで who that という形式が存在したことも指摘している。不定関係代名詞として使用された両者は、次第に異なる機能を持つようになり、前者が不定関係代名詞の機能を保持するのに対し、後者は定関係代名詞に展開する。who that の that は古くから用いられた限定詞が保

詞が定関係代名詞へと展開していく萌芽を見ているのである。さらにカームは、古い時代の英語に不定関係代名詞として機能する単独の *hwa* が不特定の意味合いを持つ先行詞と共に起する例が存在することも指摘している：

- (10) A hwam mai **he** luue treweliche **hwa** ne luues his brother? (Old English Homilies of the Twelfth and Thirteenth Centuries, 1, 274; Curme 1931: 211) (ああ、自分の兄弟すら愛せない人が、誰を本当に愛せるのでしょうか?)

以上、疑問詞もしくは不定関係代名詞から定関係代名詞が派生する道筋を概観したが、ここで注意すべきは、英語の *who* と異なり、ドイツ語の *wer* が現代語では一般的な定関係代名詞として機能せず、不定関係代名詞に留まっている点である。しかしながら、中世に書かれたテキストに目を向けると、次のような例を見出すこともできる。

- (11) Der krîe dô vil maneger wîelt, / **swer** vor sîner tjoste hielt, [...]
(Parzival 80, 3–4)²²⁾ (彼の槍の前にした多くの者が叫び声を上げた。)

即ち、*wer* — *swer* — は *welcher*, *which*, *who* と同様に定関係代名詞へ

持されたもので、*who* が先行詞を指し、*that* は *who* が後続文と関連することを示した。後に *who* が先行詞と後続文の両方と密接に関連するようになると、*that* は機能を失い、消滅する。さらに、古英語には単独で用いられる不定関係代名詞の *hwa* も存在した。これも *swa hwa swa* と同様の方法で定関係代名詞に展開し、その結果、中英語では *who* と *who that* が並存することになる (Curme 1931: 210)。

- 22) 出典は次の通り：Wolfram von Eschenbach: Parzival. Mittelhochdeutscher Text nach der sechsten Ausgabe von Karl Lachmann. Übersetzung von Peter Knecht. Einführung zum Text von Bernd Schirok. Berlin et al. 1998.

と展開する素地を持っていた²³⁾が、実際にはその道は開かれなかったということになる。この点も視野に含めて、次章では現代語に見られる定関係代名詞の体系がそれぞれの言語において形成される過程を考察することとしたい。その記述の中心をなすのは、現代語においてその現れ方に著しい相違が生じている *welcher* と *which* であり、具体的にはその導入、そして衰退もしくは使用の継続を牽引した社会言語学的要因を検討する。

4. 定関係代名詞の体系の変遷過程 — 社会言語学的要因

まず、本論に入る前に、ドイツ語と英語の相違として予め念頭におくべき点を確認しておこう。それは前者では定関係代名詞の場合も含めて、屈折形がかなりよく保持されているのに対し、後者では中英語期の初めにそれが広範囲にわたって失われてしまった（ボー／ケイブル 1981: 195）点である。²⁴⁾ 指示代名詞由来のものに即して言うならば、*der* はこれを含めて性・数・格に関する 16 の屈折形を持つが、英語の場合は、本来は中

23) 実のところ、*wer* と同様のことは本稿では顧慮しなかったドイツ語の不定関係代名詞 *was* — 古高ドイツ語 *so* [h]waz so — にもあてはまる。ただし、註 5 でふれた通り、*was* は中性形の指示代名詞 *das*、不定代名詞 *alles*, *etwas*, *nichts*, 最上級の形容詞を名詞化したものの他、名詞化された原級の形容詞のうち、一般的、不特定、もしくは純粹に概念的な意味合いを持つもの（例えば *all das Schöne*）等も先行詞とすることができる（Duden 1998: 765）。この点に目を向けるならば、*was* の機能は先行詞を持ち得ない *wer* に比して定関係代名詞のそれへかなり接近していると言えるだろう。

24) ちなみに、ボー／ケイブル（1981: 202）によると、言語は他言語から単語は受け入れるが文法は借入しない。ノルマン人によるイギリス征服の後、中英語において屈折変化の衰退と形態の混乱が起こるが、それはフランス語が英語に混入し、借用語の屈折変化が負担になったからというよりはむしろ、ノルマン人がイギリスを征服した結果、英語が主として教養のない人々の言語になったことによる。即ち、英語の文法的変化が障害を受けずに進行することをより容易にしたという点においてのみ、ノルマン人のイギリス支配は英語の屈折変化の衰退に影響を及ぼしたと考えられる。

性・主格形もしくは対格形であった *that* が — 上述の通り属格としての使用には問題があるものの — どのような名詞にも、また、単数・複数形にも後続しうる、いわば使いまわしのきく定関係代名詞になっている。この点をふまえて、まずはドイツ語の *welcher* に目を向けることとしたい。

welcher が定関係代名詞としての地位を確立するのは 15 世紀以降のことである。実のところ、前方照応的な関係詞としての *welcher* の使用はドイツ語において自然発生的に起こったのではなく、恐らく中世オランダ語の影響を受けて成立したものと考えられている。*welcher* と同源のオランダ語 *welc* が関係詞の機能を帯びて現れるのは 13 世紀後半のことであり、14 世紀には既にケルンの官庁もその使用を取り入れている (Beyschlag 1938: 173–174)。高地ドイツ語圏へは 15 世紀に、殊にハンザ同盟都市の官房経由でもたらされたが、ただし、注意が必要なのは、中世オランダ語の *welc* は主として関係形容詞として使用されており (Beyschlag 1938: 175)、高地ドイツ語圏でも当初はこの用法で用いられた点である (Ebert 1999: 162)。

- (12) [...] *gen Lyer, **welche** stat 6 meil von Dysch ligt [...]* (S. Welser, 14.06.1577; Morisawa 2004: 189) (その町がディーストから 6 マイルのところにあるリールへ [...])²⁵⁾

25) 形容詞的用法の場合にも、定関係代名詞へと展開する過程には、前方照応の可能性が生じるという点で間接疑問文の存在が意味を持ったと考えられる: „lât sehen **welh** meister ir sît.“ (Der arme Heinrich 1156) (あなたがどれほどの腕前なのか見せてください。) 用例の出典は次の通り: Hartmann von Aue: Der arme Heinrich. Herausgegeben von Hermann Paul. 15. Aufl. Tübingen 1984. また、次のタイプの不定関係代名詞の形容詞的用法も注目に値するだろう: „der teile ouch danne den gewin / mit **swelhem** vriunde er welle!“ (Wigalois 4337–4338) (そうになったらその者は彼が望むどんな友とでも戦利品を分けるがよい。) 用例の出典は次の通り: Wirnt von Grafenberg: Wigalois. Text der Ausgabe von J. M. N. Kapteyn. Übersetzt, erläutert und mit einem Nachwort versehen von Sabine Seelbach

そこから *welcher* 導入の背景は次のように推測される。当時官庁は同一文書をラテン語及びドイツ語で作成することがあったが、ラテン語の *qui* に相当する語がドイツ語には欠けていた。*qui* は疑問詞 — 「どのような種類の」 — と並び、定関係代名詞及び関係形容詞としても機能する語である。*qui* が担う三つの機能のうち、疑問詞、殊に関係形容詞としてのそれは *der* が持ち得ないものであった。そこでオランダ語に触発されてドイツ語でも *welcher* がこの間隙を埋めることとなったのである (Beyschlag 1938: 186)。即ち、*welcher* 定着の背景には直接的にはオランダ語の、そして根本的にはラテン語の影響があったとすることができるだろう。その伝播からして *welcher* は官庁語的な色彩を強く帯びていたと考えられ、当時官庁語が威信言語であったこととあいまって使用が広まったと想像される。この語は、16 世紀には教養語、また商用語としての性格を持つようになり (Ebert 1999: 162)、古くから存在し、それまで文体上の特質を持たなかった *der* と競合するようになる。

次に英語において、*which* 及び *who* が *that* に代わって使用されるようになるその要因を見ることとしよう。以下、*who* については屈折形を顧慮する必要があるため、この語形は基本的に主格のみを表すものとする。逆にまた、煩雑さを避ける必要のある場合は *which* 及び *who*、その屈折形の総称として「WH 関係詞」という語を使用する。

柳 (2008: 44) によると、12 世紀において既に定関係代名詞の *which*, *whom*, *whose* — *hwylc*, *hwam*, *hwos* — が例証される。*which* は、これと同源の *welcher* が高地ドイツ語では 15 世紀に初出したことを思い起こすならば、かなり早い時期に定関係代名詞としての機能を獲得したということになる。注目に値するのは、柳 (2008) が挙げた定関係代名詞の中に *who* が含まれていない点である。この定関係代名詞は 13 世紀のテク

und Ulrich Seelbach. Berlin et al. 2005. ちなみに、不定関係代名詞の *welcher* は 18 世紀前半まで、不定関係代名詞の *wer*, *was* と同じ用法で使用される (Ebert 1999: 167)。

ストに見出されるものの、16世紀に入るまで比較的その使用は少なかった (Curme 1931: 210)。その一因は *that* の持つ機能と関連づけて推測することができる。上述の通り、中英語期の初めには屈折形の多くが失われ、指示代名詞から派生した定関係代名詞も *that* という語形のみが現代に伝えられることとなった。現代語における *that* の形態論・統語論上の欠点は属格が問題となるときは使用できないこと、また、前置詞に後続する形では現れえないことにあった。これらのことを念頭において、まず、*which* と *whom* の使用に関し、柳 (2008: 73) の調査結果を見ると、そこでは次の点が報告されている。即ち、*which* は前置詞と共起することが多く、13、14 世紀ではそれが *which* の用例の 50% を占めること、²⁶⁾ 15 世紀に入るとその割合の下降が始まり、16 世紀に *whom* との役割分担が進むと激減する — 16 世紀には先行詞が人で、前置詞と共起する場合には、それまで主流であった *which* の代わりに *whom* が使用される —²⁷⁾ ことである。²⁸⁾ 柳 (2008) には *whose* の使用に関する詳細な言及は見られないが、Romaine (1982: 62) では、WH 関係詞の使用が始まった際、最初に現れたのは、前置詞と共起する事例に加え、属格の事例であったと述べられている。以上をまとめるならば、WH 関係詞は *that* — 及びゼロ関係詞 — に欠けていた機能を補うために使用され始めたということになるだろう。即ち、ここ

26) ただし、柳 (2008) は定関係代名詞の場合のデータと不定関係代名詞の場合のそれを明確に分けていない点に注意が必要である。

27) 出現当初、*which* の先行詞は中性の名詞類に限られていたが、徐々に生物か非生物か — また、単数か複数か — ということにかかわらず、使用頻度は高まっていく (Romaine 1982: 61)。しかし、*who* が定着した後は再び事物を先行詞とする場合に限定されるようになっていく。人を先行詞とする *which* の名残は現代でも用いられる『主の祈り』の一節にも見られる: “Our Father, which art in heaven” (天にましますわれらの父よ) (ポー／ケイブル 1981: 308)。

28) 柳 (2008) では、16 世紀に関するデータのみ、次の文献から援用されている: Rydén, Mats (1966): *Relative Constructions in Early Sixteenth Century English: With Special Reference to Sir Thomas Elyot*. Uppsala.

では、ライトフット (1979: 333) の言う「機能を形式で明示するという意味合いでの」「透明性の原則 (Transparency Principle)」が働いたことになる。WH 関係詞の使用が始まった頃、who だけが現れなかった理由も、主格の機能に関しては、that もしくはゼロ関係詞を用いても、構文の分析にさほど大きな困難がなく、who の使用によって埋めねばならない間隙が体系内に存在しなかったことに求められる。それにもかかわらず、who が定関係代名詞へと展開しえたのは、恐らく、whose 及び whom が定関係代名詞として定着したことからその主格も同等の機能を持つとの類推が働いたことによると考えられる (Lightfoot 1979: 334-335)。

以上は、「透明性の原則」に即した、即ち、言語内的観点からの説明であるが、前置詞と共起する WH 関係詞の使用促進については、上でその研究結果の一部を引用した柳 (2008) が社会言語学的観点のもとで要因についても指摘を行なっているので、次にその概略を記しておきたい。

柳 (2008) が資料としたのは 12 世紀から 16 世紀に書かれた散文テキストであり、その多くはラテン語 — もしくはフランス語 — の翻訳²⁹⁾ である。データ分析はテキストの用途とその対象 — 受容者 — も顧慮して行なわれているが、説教 (sermon)³⁰⁾ において WH 関係詞が前置詞と共起する割合が比較的高いことに注目し、そこから、この種のテキストが原語の統語を模倣して英訳され、ラテン語を知らない人々のために用いられたことを、使用促進の主な要因と見ている (柳 2008: 73)。ドイツ語の

29) ラテン語を原典とするが自由訳であったり、一つの原典に限定されないもの等もその中に含まれている (柳 2008: 34)。

30) 「ラテン語の説教と英語の説教に線を引くことは難しい。英語で記録された説教は英語で説教がなされたが、ラテン語の説教はラテン語でなされるとは限らず、普通は英語でなされた。英語の説教にもラテン語が含まれ、ラテン語を声に出して読んだ後、無学の者のために英語で翻訳されたかもしれない。説教を論じるとき、平信徒の教育、特に 14 世紀後半から 15 世紀にかけてラテン語に対抗できるほどに英語が発達していたかの問題は避けて通れない [...]」 (柳 2008: 60)

welcher とはいささか意味合いは異なるものの、ラテン語 — 及びオランダ語もしくはフランス語 — の統語の模倣、即ち外国語の影響という点では welcher と WH 関係詞の使用促進の共通点を見出すことができるだろう。

柳（2008）の指摘は前置詞と共に起する WH 関係詞に関するものなので、そこには当然のことながら主格の who は含まれないのだが、この定関係代名詞の使用促進についてもラテン語の影響を想定しうるものが既に従来研究で指摘されている。上述の通り、16 世紀に到るまで who の使用は頻繁ではなかったが、人が先行詞となるとときに which や that に代わって現れることもあった。ただし、その使用域は書簡体に限られており、当時の人々が手紙を書くときに参照したマニュアルはその大部分がラテン語で書かれていた。そこからラテン語の影響という要因が導き出されたのである（Romaine 1982: 62）。³¹⁾

ここで、who に相当するドイツ語の wer が定関係代名詞として定着しなかった要因を考えてみたい。まず思い浮かぶのは、wer が専ら「人」を表す疑問詞・不定関係代名詞であり、名詞類が一性・数・格に応じた複雑な屈折形を保持しているドイツ語では、先行詞との性・数に関する一致を明示することが困難だということである。また、複雑な屈折形を持つ welcher、そして、本稿では紙面の制約からその詳述を割愛したが、welcher よりも少し早い時期 — 14 世紀³²⁾ — に so も関係詞として使用されていた。16 世紀には welcher が商用語・教養語、so は官庁語として機能し、無標 — ただし、welcher、so との対立という点では、「口語」と言った方が妥当かもしれない — の der と競合していた。このように、既に競合する要素が複数存在しており、wer には der の持つ統語機能を補う素

31) ただし、16 世紀までの書簡は口語体で書かれていたとし、who は口語的要素だったとする見解もある（Romaine 1982: 62）。

32) Ebert (1999: 164) では関係詞 so の用例が掲げられているが、その中では 1371 年のものが最も古い。so が関係詞として読み替え可能となるその素地については Paul (2007: 426) を参照。

地がなかったということ、また、あえてその使用を促すような社会言語学的要因も存在しなかったということが、wer が不定関係代名詞に留まった要因と想像される。

それでは次に、welcher が後退する経緯を概観することとしよう。³³⁾ 18 世紀の著名な文法家アーデルングは、welcher は改まった語り口に最も適した定関係代名詞であり、打ち解けた口調ではしばしば welcher の代わりに der が用いられるという見解を示している (Adelung 1977 (1781): 253–254)。即ち、welcher は 18 世紀においても教養語的な、さらには荘重な意味合いを持つ文体手段として機能していた³⁴⁾ ことになる。しかしながら、19 世紀後半からは welcher の後退が始まり、ついには「重苦しい表現」(Duden 1998: 346) として完全に der の影に隠れてしまう。その後退には welcher と der の間には文体的側面を除き、大きな用法上の差がなかったこと、そして welcher が帯びていた文体的色彩に対する社会的評価が時とともに変わったことが関連していると考えられる。

19 世紀後半の人々の言語意識を端的に示すのが、言語批評家グスタフ・ヴストマンの見解である。ヴストマンは彼の著書『さまざまな語法上の誤り (Allerhand Sprachdummheiten)』(1891) において welcher の使用を非難するが、その理由は、元来定関係代名詞の機能を持っていなかったこの語が、その機能を得た後、専ら文語において使用されることにある。換言するならば、ヴストマンが問題とするのは、口語、即ち生きた言語でこの定関係代名詞が使用されないことであり、それにもかかわらず「無味乾燥な」welcher³⁵⁾ が多用されるのは、学校で welcher 以外の定関係代名詞

33) welcher 後退の経緯に関するより詳しい記述については、以下に指示する Schikorsky (1990) の当該箇所その他、森澤 (2008) を参照。

34) 17 世紀末から 18 世紀前半の新聞や雑誌における関係詞の分布を取り上げた Semenjuk (1972: 131–133) においても、文芸的な内容のものと異なり、政治的内容のテキストでは welcher が頻出の関係詞であることが指摘されている。

35) ヴストマンは言及していないが、上述のように関係詞としての welcher

を学ぶ機会がなく³⁶⁾、文章を書くときにはこの定関係代名詞を用いる習慣が身につけてしまうからだと言う。ヴストマンの激しい非難が *welcher* の使用に及ぼした影響の度合いについては検証するのが容易ではないが、いずれにせよ、その後 *welcher* に付された文体的評価からして、シコルスキー (1990: 271-272) が指摘しているように、ヴストマンを始めとする有識者達によりこの語の使用に批判的な論調が世に広まったことが後退の要因と見ることも可能と思われる。これをラボフが挙げた言語変化のメカニズムに即して言うならば、「上からの変化」が *welcher* の使用に関して起こったということになるだろう。

最後に、英語では 16 世紀までにほぼ出揃った定関係代名詞が、いずれも大きく後退することなく現代に到るその要因を見ることとしよう。

まず、言及しておきたいのは、16 世紀における *that* と WH 関係詞の文上の機能分担であるが、この点については、16 世紀にスコットランド英語で書かれた資料に基づいて調査を行なったロメイン (1982: 214) の指摘を挙げておくこととする。ロメインはテキスト種を顧慮した研究を行なっているが、その指摘とは口語性の強いテキストでは *that*、文語性の強いテキストでは WH 関係詞の出現率がより高いというものである。即ち、現代語に見られる機能分担が既に 16 世紀に始まっているということである。

that は「透明性の原則」からすれば欠点のある定関係代名詞であることは上で述べたが、これはまた、ゼロ関係詞にも共通して言えることである。

がドイツで最初に例証されるのは 14 世紀におけるケルンの官庁テキストである。19 世紀には既に官庁語自体が威信言語としての地位を失っているが、*welcher* が「無味乾燥」と評される背後にはこの語の由来も関わりがあるように思われる。ヴストマンのこの見解は例えば、ヘルマン・ダウンガーにより批判されているが、ダウンガーはミュンヘンやウィーンの口語では *welcher* が使用されることを指摘している (森澤 2008: 22-25)。

36) ただし、Schieb (1981: 164) によると、当時の学校文法には何の付言もなかったものの *welcher* と *der* が並置されていた。

ゼロ関係詞が形態論・統語論上の欠点を持つことと、古英語において既にそれほど頻繁に見られなくなっていたことを顧慮するならば、この関係詞はドイツ語の場合と同様に廃用になる可能性も孕んでいたはずである。しかしながら、中英語期に入ると逆にゼロ関係詞はその使用頻度を増していく。ゼロ関係詞が現れるテキスト種に関しては、中英語初期には散文での使用は稀であり、むしろ韻文での出現頻度が高かった。そこから、韻律上の目的で多用され始めたと考えられる。16世紀末になると、ゼロ関係詞は散文で書かれた文学作品、例えばシェークスピアでも散見するようになる (Romaine 1982: 74–75)。³⁷⁾ しかしながら、18世紀に入り、文法家達が規則を定め、それに合わないものを禁止することに多大な精力を注ぎ込み始めると、ゼロ関係詞は攻撃を受けることになり、大評論家で英語大辞典の編纂者でもあるサミュエル・ジョンソンに到ってはこれを「口語体の蛮語」と呼んだ。18世紀にはラテン文法が研究と模倣の価値のある唯一のものであったが、この言語に対応するものがない言語現象は排除の対象となったようである (Jespersen 1979: 128–129)。

that は、15世紀に which が交替的に使用されるようになってからも、その使用が大幅に後退することはなかったが、やはり、18世紀に入るとその状況に変化が現れる。この世紀の前半に発行された英国の日報『スペクテイター (The Spectator)』78号 (1711) には、この新聞の創刊者であるアディソンにより、that の隆盛に抗議する『Who と Which の謙虚な請願 (“Humble Petition of *Who* and *Which*”)』と題する書簡体の記事³⁸⁾ が掲載された (ボー／ケイブル 1981: 308)。この作品については

37) それゆえ、「定関係代名詞の省略」は、that や which との対立が問題となる16世紀以降になって初めて意味を持つ発想と言える (Romaine 1982: 74)。

38) そこでは、「われらは旧家の子孫である。あのこびとの that がわれわれに取って代わるまでは、品位と名誉とを、長い年月保ってきた」(Jespersen 1979: 129) と述べられている。ただし、who 及び which が that よりも古いとするアディソンは、一稿3章の記述から看取されるように一歴史的事実を誤認している。

Jespersen (1979: 129–130) にも言及が見られ、そこではアディソンが who 及び which を優先させる理由はやはりそれらがラテン語の定関係代名詞に対応する語を持つことにあととされている。さらに、イエスペルセンは、アディソンのこの文章が少なくとも文語において that の使用を制限することに大きく貢献したと述べている。逆の見方をすれば、アディソンの見解は WH 関係詞の使用に有利に働いたということになるであろう。

上で述べたような制約をゼロ関係詞と that が受けたにもかかわらず、welcher と異なり現代に生き延びた要因を特定するのは困難だが、ひょっとしたら、その一つは後者が比較的新しく現れた文語的要素だったのに対し、前二者が古くから存在する口語的要素であることに求められるかもしれない。文法家を始めとする学識者の見解は文章を書くときには顧慮される度合いが高いであろうが、それが口語に根付いた要素を排除するのは一殊に方言には古い語法が残りやすいことに目を向けるならば—それほど容易ではないと想像される。ドイツ語の der も古くから存在し、18 世紀のアーデルングの見解では打ち解けた口調で使われる要素、即ち、口語的要素とされていたが、結局は後から成立した文語的な welcher が後退し、der が単独で一般的な定関係代名詞としての地位を確立するに到る。しかし、次の要因も考えられる。ゼロ関係詞は制限的用法でしか用いられず、that もこの用法で使用される傾向が強い。殊に、that については、一時、その使用を制限的用法の標識とすべきという見解があった (Curme 1931: 224) のだが、口語では文語のようにコンマの有無によって非制限的用法との相違を表現する可能性がないことに目を向けるならば、機能の明示という点で両者の存続が必要だったのかもしれない。

以上、ドイツ語及び英語の定関係代名詞の体系が成立する過程を概観した。そこから看取されるのは言語変化がいかに複雑に言語内的要因と社会言語学的要因が絡み合っているかという点であるが、その中で、殊に社会言語学的要因が両言語における体系の変化に大きく関与した点として次の二点を確認しておきたい。まず、ドイツ語の場合は、der が定関係代

名詞として定着した後に *welcher* が現れ、また、英語においても *that* の後に *which* の使用が始まる。確かに *welcher* と *which* の導入時期は異なり、特に前者はドイツ語の中で自然発生したというよりも、オランダ語から直接的な影響を受けて成立した可能性が高く、その点については相違があるのだが、しかし、これらが定関係代名詞として定着する背景には共通してラテン語の影響という社会言語学的要因があった。

また、現代語において、ドイツ語の *welcher* が大きく後退しているのに対し、*which* は、殊に文語において一般的な定関係代名詞としての地位を保っている。両者の行く末を方向づけたのは、まずは両者がその当時持っていた言語機能だと考えられるが、*welcher* の使用には 19 世紀において「無味乾燥」という社会的評価が下されたこと、また、*which* の場合は逆に 18 世紀においてその使用を擁護する声が学識者の中から上がったことが大変大きな意味を持った。即ち、これは、言語変化を意図的に牽引しようとする社会的判断が二つの同源の語が向かう方向を大きく変えた事例と見ることができるだろう。

5. 終わりに

本稿では現代のドイツ語と英語に見られる定関係代名詞の体系が形成される過程を考察し、殊に、*welcher* と *which* の導入、また、後退もしくは使用の継続には、これを牽引する社会言語学的要因が働いていた点を指摘した。

最後に本稿では紙面の制約から割愛したことがらについて言及しておきたい。上でふれたように 14 世紀から — 18 世紀頃まで — ドイツ語では *so* が関係詞として用いられ、*der* 及び *welcher* と競合したが、*so* と同源の *as* も現代語で定関係代名詞が補語となる場合に — 一般的には *which* が使用されるものの (Curme 1931: 229) — 現れる³⁹⁾ ことがある (Curme

39) *as* の用例は次の通り: “But in this matter the men of culture is just like

1931: 219)。より精緻な知見を得るためにも、so や as のような要素も視野に含めた上で、両言語における定関係代名詞の体系変化を社会言語学的観点から考察することが、今後の課題となるところである。

主要参考文献

- Adelung, Johann Christoph (1777): Deutsche Sprachlehre. Hildesheim et al.: Nachdruck der Ausgabe Berlin 1781.
- 荒木一雄 (1978): 関係詞 (英文法シリーズ第5巻)。25版 研究社。
- ボー, アルバート・C / ケイブル, トマス (1981): 英語史。永嶋大典他訳 研究社出版。
- Behaghel, Otto (1928): Deutsche Syntax. 3. Bd. Heidelberg.
- Beyschlag, Siegfried (1938): Zur Entstehung des bestimmten Relativpronomens *welcher*. In: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur. 75. Bd. Berlin, 173–187.
- Birkner, Karin: Relativ(satz)konstruktionen im gesprochenen Deutsch. Berlin et al.
- セルセーマーシャ, M. / ラーセン・フリーマン, D. (1986): 現代英文法教本。大塚英語教育研究会訳 リーベル出版。
- Curme, George O. (1931): Syntax. Boston et al.
- Curme, George O. (1960): A grammar of the German language. 2nd ed. New York.
- Dal, Ingerid (1966): Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage. 3. Aufl. Tübingen.
- Duden (1998): Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. 6. Aufl. Herausgegeben von der Dudenredaktion. Bearbeitet von Peter Eisenberg et al. Mannheim et al.
- Ebert, Robert Peter (1999): Historische Syntax des Deutschen II: 1300–1750. 2. Aufl. Berlin.
- Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm (1984): Deutsches Wörterbuch (=DWB). 28. Bd. München: Nachdruck der Erstausgabe Leipzig 1955.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (1987): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 10. Aufl. Leipzig.

the vulgar herd, **as** he would call them.” (The Times Literary Supplement [Kruisinga]) (しかしこの問題については、教養ある人士も、彼のいわゆる「卑俗な民衆」とえらぶところがない。) (荒木 1978: 59)

- Jespersen, Otto (1926): Notes on relative clauses. In: S. P. E. tract. No. 24. London, 103–117.
- Jespersen, Otto (1979): 英語の発達と構造。大澤銀作訳 文化書房博文社。
- 小寺茂明 (2004): いわゆる接触節について。『大阪教育大学紀要』第 I 部門 第 53 巻 第 1 号 17–29。
- 小寺茂明 (2008): 関係代名詞の制限的用法と非制限的用法。『大阪教育大学紀要』第 I 部門 第 56 巻 第 2 号 39–53。
- Labov, William (1972): Sociolinguistic Patterns. Philadelphia.
- Lightfoot, David W. (1979): Principles of diachronic syntax. Cambridge et al.
- 前島儀一郎 (1987): 英独比較文法。4 版 大学書林。
- Morisawa, Mariko (2004): Syntaktische Erscheinungen als Spiegel der Gesellschaft im 16. Jahrhundert. Historisch-soziolinguistische Analyse von Relativsatzeinleitungen in der Nürnberger Stadtsprache. In: Neue Beiträge zur Germanistik. 3. Bd. Heft 1. Internationale Ausgabe von „Doitsu Bungaku“. München, 183–195.
- 森澤万里子 (2008): 19 世紀における定関係代名詞 welcher の後退 — 文体手段とテキスト種をめぐる考察 —。『言語変化をめぐる独英比較 — 社会言語学的観点から』(平成 18 年度～平成 19 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書, 研究代表者: 森澤万里子, 課題番号: 18520340), 5–32。
- 森澤万里子 (2009): 16 世紀後半の時事報告における関係詞の分布について — パンフレットとピラに関する文体論的考察 —。福岡大学『人文論叢』第 41 巻 第 2 号 707–732。
- Nevalainen, Terttu/Raumolin-Brunberg, Helena (2003): Historical Sociolinguistics: Language Change in Tudor and Stuart England. London et al.
- Paul, Hermann (2007): Mittelhochdeutsche Grammatik. Bearbeitet von Thomas Klein et al. 25. Aufl. Tübingen.
- Polenz, Peter von (1994): Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. 2. Bd. Berlin et al.
- Romaine, Suzanne (1982): Socio-historical linguistics: its status and methodology. Cambridge et al.
- Schieb, Gabriele (1981): Zu Stand und Wirkungsbereich der kodifizierten grammatischen Norm Ende des 19. Jahrhunderts. In: Beiträge zur Erforschung der deutschen Sprache. Leipzig, 134–176.
- Schikorsky, Isa (1990): Private Schriftlichkeit im 19. Jahrhundert. Untersuchungen zur Geschichte des alltäglichen Sprachverhaltens ›kleiner

Leute $\langle$. Tübingen.

Semenjuk, Natalia N. (1972): Zustand und Evolution der grammatischen Normen des Deutschen in der I. Hälfte des 18. Jh. am Sprachstoff der periodischen Schriften. In: Studien zur Geschichte der deutschen Sprache. Berlin, 79–166.

ヴァカーリ, オレステ (1964): 英文法詳論。丸善。

Visser, F. Th. (1963): An historical syntax of the English language. Pt. 1. Leiden.

柳さよ (2008): WH 関係詞の起こりと伝播 —12–16 世紀散文テキストの用途からの考察—。『言語変化をめぐる独英比較 —社会言語学的観点から』, 33–87。